

美しい多摩川フォーラム

新発見！

# 多摩の物語

青梅・あきる野・奥多摩で出会う物語

## はじめに

東京の奥座敷である、青梅、あきる野、奥多摩は、自然が豊かなことは言うまでもなく、これまで多くの文化人に愛され、あるいは、江戸の中心部への物資の輸送による流通の発達と繁栄があり、また、街道の開通にともない、地元の様々なお話が伝えられてきた土地です。まさに、奥座敷の名にふさわしい、訪問者おもてなしの要素にあふれた文化の宝庫です。

美しい多摩川フォーラムでは、多摩川流域の自然、食、文化が調和した質の高い「観光ビジネス」を創出し、都市部や農村部など様々な顔を持つ地域どうしでの「観光交流人口の増加」による地域の活性化を目指す取り組みの中で、特に、地域に伝わるいわれや昔話、食文化、歳時など、地域独特で、かつ地域の人々が大事に受け継いでいるものを、地域の宝（資源）と捉えて着目し、観光や地域振興の素材として活用してはどうかと考え、実行委員会を立ち上げ、まず、青梅、あきる野、奥多摩で活動を行いました。

ここにまとめたのは、実行委員会のメンバーが、現地に出向いて取材し、その土地を訪問

して出会った素敵な物語や様々な文化を、よりわかりやすく「語り」で伝えるために、訪問者の立場で編み、物語作品（「多摩の物語」）に仕上げたものです。

これは、語るためのお話です。

歩く道々で出会った古くからの言い伝えや行事、食べ物（青梅―梅の粕漬け・麦こがし、あきる野―ところいも、奥多摩―岩魚・奥多摩山女など）のエピソードが登場します。

この語りをお聴きになった方が、その魅力を感じて、実際に現地を訪れていただければ、何よりの喜びです。そして、皆さんもこれらのお話を多くの人に語っていただければ幸いです。それぞれの地域で、たくさんの方々に、取材のご協力をいただきました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

平成二十六年三月

美しい多摩川フォーラム副会長 平野啓子

## 目次

一、青梅編	4
青梅のお狗さま	4
青梅と「雪女伝説」	13
二、あきる野編	34
あきる野五日市、今、昔	34
三、奥多摩編	42
奥多摩むかし道	42
盗まれた馬頭様・熊をくすぐる	45

## 青梅のお狗さま

「私は、この青梅の山に古くから生き続けてきたホウノキじゃ。ご存知ないかも知れないが、ひとり静かに、この場所から里のくらしを見守ってきたんじゃよ。この辺りもずいぶんと変わってしまったがのう。若いころがなつかしい。いつも私のまわりを、たくさんの狼たちが走り回っていたものじゃ。だが、いつのまにかその姿も見かけぬようになってしまった。聞くところによると、もうわが国にはおらんようじゃ。寂しいものだのう。それでも里の人々は狼を『お狗さま』と言って、親しみを込め呼んでおるようじゃよ。

おお、そうじゃ。この『お狗さま』について、少しだけ話を聞いてください」  
昔々、大和を治めていた景行天皇（第十二代）は、東国を平定するために

日本武尊を送りました。

尊はようやく長旅の末東国に入ると、御岳山上に陣を置き、さつそく一帯に睨みをきかせ東国を平定したのでした。

ところが、ある所でふたたび反乱が起こり、鎮圧のために兵と共に山伝いに進んでいる時のこと。突然、鬼の化身である白い大鹿が飛び出してきて、行く手を阻みました。

すると、その時、地鳴りとともに白い霧が湧きあがり、中から真っ白い狼が現れて尊を助けてくれたのでした。尊は白い狼に礼を言うと、

「汝はこれより御岳山に行け。

そして、火災、盗難などの災いから我が陣を守るように」と命じました。

狼は深々と尊に一礼すると、そのまま走り去りました。

「この狼こそが、御岳山上にあるあの武蔵御嶽神社の『お狗さま』なんじゃ。

『御嶽講』として、昔からたくさんの方が詣でておる。火防・盗難除けの守り神で、お札にも描かれておる。そして、このお狗さま信仰は多摩川や街道に沿って、広く多摩地区にも伝わったようじゃ。だが、里人たちにとっては敬いつつも、おそろしい存在であったようじゃよ。そのひとつ『送り狼』を皆さんはご存知かな」

昔、ある男が峠を越えて町まで出かけました。村人たちから頼まれて葎や籠などを売りにいくのです。売り終えてやれやれと…意気揚々と帰る頃には、とっぷりとした日暮れてしまいました。それでも暗い山道をひたすらみんなの待つ村をめざし急ぎました。月明かりがあるとはいえ、たったひとりの夜道はなんとも怖いものでした。しばらくすると、ひたひた・ひたひたと、だれかがつけてくるような音がするのです。

「これは、もしやあの噂に聞いた送り狼かしんねえな」

男はぞっとして足が進まなくなっていました。

送り狼とは…暗い夜道などをひとり歩いてみると、いつのまにかそのあとに付いてくる狼の事です。しかし、もし何かのはずみで転んだりすると、たちまち本性をあらわし、襲いかかってくる恐ろしい狼です。ですから、たとえ転んでも「ああ、ひとやすみ」「どっこいしょ」などと言って、転んでいないように見せかけをしないとならないのです。

そして、無事に家までたどり着けたなら、何がしかの品物を渡してお礼を言います。すると狼は静かに、また山に帰って行くのだそうです。

男はこの話を思い出すと、必死で歩き続け、どうにか村まで戻ってきました。

家に入るや否や、さっそく男は狼の好物である塩を差し上げ「ありがとよ」と言うとうと、狼は平然と向きを変え、山へ帰っていったという事です。

「人と狼とがこれほど近いところで共に暮らしていた時代があったのじゃ。

そうそう…実はな…今も生きていると信じられているお狗さまがおるそうじゃ。



(青梅の) 小曾木おそぎにある御嶽神社では、お狗さまの存在を信じて祀る『お炊き上げ』が大切に受け継がれておる。では、来賓として参加した人の話を聞いてみることにしよう」

この『お炊き上げ』とは、その年にとれた新米を炊き上げたご飯を、塩とともにお狗さまにお供えする神事の事です。毎年十二月の初旬に行われます。

神事は午前九時からで、鳥居の前に、正装の宮司・神社総代・氏子の方々など二十名あまりの参列者が集まりました。その中の一人が、炊き上げた三合のご飯を盛りつけた木皿を、もう一人が、たっぷりの塩を盛った木皿を、それぞれささげ持っています。そして、列を作り神社の裏山にあるお狗さまの祠まで上りつくと、ご飯と塩が供えられます。続いて、宮司の祝詞のりと・お祓はらいのあと、順に玉串をささげ、



来る年の安泰を祈ります。厳肅な空気があたりを包み、身の引き締まる思いです。当日の神事はここまでですが…

実は、これからが『お炊き上げ』の緊張する日々となります。

お供えしたご飯と塩の山に、食べたり触れたりしたような跡が付けば、「お手が付いた」といい、お狗さまが実際にお出ましくくださった印とされ、次の年のこの地区の無事安泰が叶うとされています。しかし、十日以上たってもそのままの場合は、やり直しをしなければなりません。

お手が付いたという知らせを待つておりましたところ…その年の暮れも押し詰まった十二月三十日。「やつとお手が付きましたよ。これでひと安心です」と、うれしそうな声で神社総代から連絡が入り、ようやくこちらも安堵いたしました。

ところで、神事には欠かせないお神酒みきですが、かつて、この青梅には、たくさん造酒屋がありました。その豊富な酒粕を使った『梅の粕漬け』という青梅の特産品があるのを、みなさまはご存知でしょうか。酒粕が出回るのは晩秋から一月にか

けてですが、この酒粕にみりん等を加え、粕床を作り、梅が実る時期まで涼しい所に保存しておくのだそうです。

やがて、梅が実る六月頃。特に形の良い若い青梅だけを選び、瓶かめなどに酒粕・梅・塩・酒粕・梅・塩：と、何層にも重ねて漬け込みます。近頃では作る人もめっきり少なくなり、もう幻の味になってしまったのでは：？と気がかりでしたが、限られた催し物会場や店舗で今も売られているのがわかりました。

色はきれいな緑色。酒粕の香りが漂い、少々ほろ苦くカリカリとした食感。どちらかと言えば、大人向きの味です。そのまま食べたり、刻んで和え物にしたり、いろいろ楽しめますが、地元では、ひと昔前まで、運動会やお正月に特に珍重されよく食べられていたようです。地元根付いた貴重な味。青梅ならではの『梅の粕漬け』が店先に並ぶ秋を、心待ちにしている人たちはまだまだ多いようです。

これからも、是非、作り、伝え続けられますよう願っています。

「なるほど…『青梅』の名のごとく、青い梅で作る粕漬け…」

ひとしお、つながりの深さを感じるものなのう。

さて、小曾木の『お炊き上げ』に話を戻そう。神事の後は、お狗さまのお札が皆に配られる。同じ青梅であっても、その地区により多少違いはあるが、酒蔵をはじめ、各家に昔から貼られておった。

お狗さまは、火防・盗難除けの守り神。決して、いかげんにお祀りしたり粗末にあつかつてはならない神さまじゃ。

昭和の時代。ある時、こんな不思議なことがあった。この神社の普請をした職人が、お狗さまの話を聞いて、「そんな馬鹿なことがあるもんか」と笑った。ところがじゃ。家に帰ると、どうしたわけかいっこうに前に進めず、中に入れん。真っ青になつて祠ほこらに戻り、「もう二度と無礼なことは申しません」と丁寧に謝り頭を下げると、ようやく、家に入ることができたらしいんじゃ。

このように、里人たちにとって『お狗さま』とはなあ… どうやら、狼の持つ能力に、畏れ敬う気持ちを抱くと共に、『霊獣』として生きる者たちの心の拠りど

ころになっておるようだな。興味深いことは、青梅の周辺地域に、特にお狗さま信仰が集中していることなんじゃよ。この『お狗さま』を、守り信じる心をこれからも大事にしていきたいものじゃ。

やがて、いつの日か狼たちが、再びこの山々を駆け巡る日が戻ってくるであろうか。そう願いつつ、私はここで見守りつづける事にしよう」

青梅班（木下・西尾・柳澤）

## 青梅と「雪女伝説」

「さあ、青梅について！」

雪女の伝説に出会えるかもしれないというので青梅にまいりました。と申しますのも、ラフカディオ・ハーンハーン 小泉八雲の名作「雪女」が、最初に英語で書かれたときには、その序文に『雪おんな』という奇妙な物語は、武蔵の国、西多摩郡、調布村の百姓が、自分の生まれた村の伝説として物語ってくれたものである」という意味の文章があったのです。ハーンハーンの「雪女」はみなさんよくご存知ですよ。まず、お聴きください。こういうお話です。

### 雪女

武蔵の国のある村に、茂作もさくと巳之吉みのきちという二人の樵きこりが住んでいました。これからお話するのは、茂作はすでに老翁ろうやうになっており、見習いの巳之吉はまだ

十八の若者だったころのお話です。

毎日二人は、村から二里ほど離れた森に出かけて行きました。森へ行く途中には、大きな川が流れていて、渡し船が通っていました。いくたびとなく橋がかけられたのですが、川の水嵩みずかさが増すと、並みの橋ではとても持ち堪こたえることができず、そのたびに橋は流されてしまいました。

あるとても寒い日暮れ時のことでした。家路につこうとしていた茂作と巳之吉は、激しい吹雪に見舞われました。船つき場にたどり着いてみると、渡し守は船を向こう岸につけたまま、帰ってしまっていました。とても向こう岸まで泳いで渡れるような日ではありませんでした。二人は渡し守の小屋を見つけると、これ幸いと身を寄せました。

ところが、二畳ばかりの小さな小屋には火鉢はおろか、火をおこす場所さえありません。戸口がひとつあるきりで、窓はありませんでした。茂作と巳之吉

は戸口をしっかりと閉めると、体に蓑みをかけて、横になりました。初めのうちは、それほど寒さは感じず、二人はこうしていれば、じきに吹雪も止むだろうと思っていました。

茂作はたちまち眠りこんでしまいましたが、巳之吉は長いこと眠られずに、恐ろしい風の音や、戸口を打ちつける絶え間ない吹雪の音に耳を澄ましていました。川は轟音ごうおんを上げながら流れ、小屋は大海の大波に揉もまれる小舟のように、きしきしと音をたてて軋きしんでいました。

それはひどい吹雪でした。刻々と寒さはつのり、巳之吉は蓑をかぶって震えていました。それでも、とうとう巳之吉も、いつのまにか眠りこんでしまいました。

顔に吹きつける雪で、巳之吉は目を覚ましました。すると、小屋の戸が開いており、雪明かりに照らされて、小屋の中に白づくめの女がいるのに気づきま

した。女は、茂作の上にかがみこんで、息を吹きかけていました。その息は真っ白い煙のように見えました。

すると、女はこちらをふりかえるがはやいか、今度は、巳之吉の上におおいかぶさってきました。巳之吉は大声で叫ぼうとしましたが、声が出ません。

白い女は、ますますふかく体をかがめ、巳之吉の顔に触れんばかりに、その顔を近づけてきます。女は恐ろしい目をしていましたが、たいそう美しいことに、巳之吉は気づきました。女は巳之吉を見つめていましたが、やがて笑みを浮かべて、こう囁ささやきました。

「わたしは、おまえをあの子のようにしてやろうと思っていたのさ。だが、おまえはたいそう若いから、どうも憐れになった。

巳之吉、おまえはなかなかきれいだから、今は許してやることにしよう。しかし、もしも、おまえが今夜見たことを、たとえ母親にでもしゃべったなら、そのときは、きっと命はないものと思うがいい。いいか、わたしの言ったことを忘れるでないぞ」

女はそう言い終えると背を向け、戸口から出ていきました。すると、ふいに体が自由になり、巳之吉は飛び起きると、外を見回しました。しかし、女の姿はもうどこにも見えず、ただ激しい雪だけが、小屋に舞いこんでくるばかりでした。

巳之吉は戸を閉め、棒切れを何本も立てかけて、開かないようにしました。風で戸がこじ開けられてしまったのではないか。たった今のはただの夢で、戸口から差しこむ雪明かりを、白い女の姿に見ま違えたのではないか。巳之吉は、不思議でたまりませんでした。

茂作に呼びかけてみましたが、巳之吉はふいに恐怖に襲われました。返事がありません。闇の中で恐るおそる手を伸ばし、茂作の顔に触ってみると、氷のように冷たいではありませんか。茂作は凍りついたまま、死んでいたので

した。

夜が明けたときには、吹雪は去っていました。日が昇り、小屋にやって来た渡し守は、茂作の冷たくなったむくろのそばに、巳之吉が気を失って倒れているのを見つけて驚きました。おおいそぎで介抱すると、巳之吉はまもなく意識を取り戻しました。

しかし、巳之吉はあの晩のひどい寒さのためにすっかり体が弱ってしまい、その後も長いこと、床に伏したままでした。茂作が死んでしまったことにも、巳之吉はひどく怯おびえていました。しかし、それでも白い衣をまとった女を見たことは、決して誰にもしゃべりませんでした。

ようやく巳之吉は元気を取り戻すと、また仕事に戻るようになりました。毎朝、ひとりで森に出かけては、夜になると木の束を背負って戻って来ました。そして、母と一緒に薪まきを売って暮らすようになりました。

あくる年のある晩方のこと、巳之吉は森から家に戻る途中、たまたま同じ道を歩いて旅している娘に追いつきました。背が高く、ほっそりとした器量良しの娘で、巳之吉が挨拶すると、まるで鳥が囀なげるように優しい声で答えました。

二人は並んで歩きながら、話し始めました。娘は名をお雪といい、先ごろ両親を亡くしたので、今は江戸に向かう途中で、そこへ行けば貧しいながらも身寄りがあるので、奉公先を見つけてくれるだろうと、話しました。

巳之吉は、たちまちこの見も知らぬ娘にすっかり心をひかれてしまいました。見れば見るほど、お雪は美しい娘に思えました。巳之吉は、お雪にいいなずけはいるのか、と尋ねました。するとお雪は「おりませんわ」と笑って答えました。そして今度は、お雪の方が巳之吉に、もうお嫁さんはいらっしゃるのですか、それとも契りを交わしたお方がいらっしゃるのですか、と尋ねてきました。巳之吉は、母親をひとり養っているが、自分は若いので、お嫁さんをもらうことはまだ考えたことがない、と答えました。

二人はそれだけ確かめあうと、あとは長い間、黙ったまま歩き続けました。

しかし、諺では「気があれば、目も口ほどにものを言う」と言います。村に着くころには、二人はすっかりうちとけていました。そして、巳之吉はお雪に、しばらく家で休んでいってはどうか、と尋ねてみました。お雪は、しばらくもじもじと、ためらっていましたが、巳之吉の申し出に従うことにしました。

巳之吉の母は喜んでお雪を迎え、温かい夕餉を用意してくれました。お雪はたしなみがよかったので、母はたちまちお雪を気に入ってしまい、江戸へ発つのを先に延ばすようにと説得しました。

その後、お雪は二度と江戸に発つことがありませんでした。それは自然な成り行きと申せましょう。お雪は「自慢の嫁」として、巳之吉の家にとどまったのでした。

お雪は本当によくできた嫁でした。それから五年ほど後に、巳之吉の母が亡くなる時にも、息子の嫁をたいそう思いやりのこもった言葉で褒め、息を引き

取ったのでした。

お雪と巳之吉は、十人の子どもをもうけましたが、どの子もみんな器量がよく、色白の子どもたちでした。

村人たちは、お雪のことを自分たちとは生まれつきどこか違う不思議な女だと思っていました。百姓の女はたいがい早く老けこんでしまうものですが、お雪は十人の子どもを産んでもなお、初めてこの村に来た時と少しも変わらず、若々しく、美しいままでした。

ある夜、お雪は子どもたちを寝かしつけ、行灯の明かりで縫い物をしていました。巳之吉は、お雪を見つめながらこう切り出しました。

「こうして縫い物をしているおまえの顔が、明かりに照らされているのを見てみると、十八の時分に起こった不思議な出来事を思い出すんだ。あのとき、今のおまえのように美しく、色白の女を見たんだ。本当におまえによく似ていた

……」

お雪は、縫い物に目を落としたまま、答えました。

「その女の<sup>ひと</sup>ことを話してくださいな。どこでお会いになったのですか」

巳之吉は、渡し守小屋での、あの恐ろしい一夜のことを話し始めました。

白い女が、につこりと笑って囁きながら、おおいかぶさってきたこと、自分の知らぬ間に茂作が死んでいたことなどを、お雪に語って聞かせました。そして、巳之吉はさらにこう言いました。

「夢か<sup>うつつ</sup>現か定かではないが、おまえと同じくらい美しい女を見たのは、あのときかぎりだ。もちろん、あの女は人間ではなからう。本当に恐ろしかった。怖くてたまらなかったが、それにしても、とても色の白い女だった。今でも分からないのだよ。あれは夢だったのか、それとも、雪女だったのか……」

すると、お雪は、いきなり縫い物を投げ捨てて立ち上がると、座っている巳之吉の上に腰をかがめ、その顔に面と向かってこう叫びました。

「それは、わたしだよ。わたしだ。このお雪だったんだよ。あのとき、もしもひと言でもしゃべったら、おまえを生かしてはおかないと言っただろう。だがな、こうして眠っている子どもたちを見れば、どうしておまえを殺すことができようか。

どうか、この子たちの面倒をよくよく見ておくれ。よもやこの子たちを苦しめるようなことがあったら、そのときこそ、おまえも相応の目にあわせてやるわ……」

そう叫びながら、お雪の声は、風の叫びのようにか細くなっていきました。そして、体はみるみる溶けて、白い霧になり、<sup>はり</sup>梁に向かって渦を描いて立ち昇ると、<sup>けむり</sup>煙出しから消えてゆきました。

その後、二度とお雪の姿を見ることはありませんでした。

さあ、それでは、早速地元青梅の雪女伝説探しです。出発！

まず、JR青梅駅のすぐ脇にある観光案内所で雪女ゆかりのところという調布橋を地図で教えていただきました。次に付近の青梅市民会館に行き、伝説について何かご存知のことがあれば教えてほしいと聞きました。すると、館長さんが、

「それなら、昭和レトロ商品博物館の二階に雪女の部屋があるから、そこへまず行ってみたいらいよいよ」

と、勧めてくれました。

「ええ！雪女の部屋…ですか」

戸惑っていると、市民会館の職員の方が丁寧に道を教えてくださって、とにかくいったん駅の方へ戻り、反対方向に五分ほど歩いていきました。すると、その昭和レトロ商品博物館がありました。細く急な階段を二階に上ると、ぼんやりと明りのついた畳の部屋があります。部屋に入るなり、何かに見られているような気がして、ふっと横を振り向くと、そこに、雪女のそれはそれは美しく恐ろしい絵が飾ってありました。雪女に関する資料もここに、たくさん置いてあったのです。

資料に、あの序文「『雪おんな』という奇妙な物語は、武蔵の国、西多摩郡、調布村の百姓が、自分の生まれた村の伝説として物語ってくれたものである」という意味の英文のコピーもあり、また、解説文を読むと、「調布村の百姓」というのは、ハーンのところ働いていた使用人のことだという説明がありました。

地元では、雪女という言い方のほかに、「雪女郎ゆきじよらう」や「雪座頭ゆきざとう」（座頭市の座頭です）という呼び方などで伝わっている十話以上のオリジナルの話があることがわかりました。

博物館で何か行事のあるときには、青梅弁で雪女の伝説を語る語り部さんが、こ

の部屋で地元のオリジナルの話を語るそうです。その方は、小川秋子さんといえます。早速、小川さんの連絡先を調べて、連絡をとってみました。すると、小川さんが次にいつ語るのかは、まだ決まっていなかったことでした。けれど、電話口でこんなことを教えてくれました。

「昔は、このあたり、多摩川を渡る渡しがいくつかあって、樵<sup>きこり</sup>たちは、その渡しで川を渡って、二里も三里も離れた山に入って行って、木を切ってきたんですよ。そして、かつて渡しのあった船溜まりのあたりには、雪女の話がたくさんあるんです」と。

ならば、伝説を知っている人が他にもいるに違いない、手当たり次第商店街の人に聞いてみよう！といくつかの商店に飛び込んで聞きまわりました。食料品店、瀬戸物店、レストランなど次々に。

しかし、ハーンの書いた雪女の話は、皆よく知っているのですが、地元にもともとあったという伝説を伝え聞いた人になかなか出会いません。

隣に赤塚不二夫会館もありました。ここは、雪女の話は関係ないだろうと思いながらも、ダメもとで入ってみました。

すると、受付にいた昭和十七年生まれの女性が、

「私は、子どもの頃、寝る前におばあちゃんが聴かせてくれたのよ」と、こんな話をしてくれました。

「樵<sup>きこり</sup>が、向こうの山へ木を切りに、橋を渡ろうとすると、橋のたもとに、なんか全身白い女が後ろ向きで立っていた。おや、誰だろう、見慣れない女だなあ、と樵がその女をじっと見ながらゆっくり橋の方へ近づいて行くと、女が急に振り返って、その途端に、バーっと大雪がこちらに向かってかかってきた。いつまでも雪が飛んでくるので、なんにも見えなくなって、わーといってしばらく目をふさいで震えていると、いつの間にか雪が弱くなり、見ると、女の姿はもうそこにはなかった。——という話だったの。その、バーっと大雪が、っていうところが怖くて怖くてね。でも、そこがまた聞きたくて、何度も、おばあちゃんに話してもらったのよ」

地元の伝説を実際に聞いていた人に会えました！

この女性のお宅は、多摩川にかかる調布橋の近くにあるそうです。ただ、調布橋ができたのは、大正時代です。

「おばあちゃんは、そのまたおばあちゃんから聞いたと言ったから、調布橋はまだなかったはずよね。だから、きつと、私たちのイメージがわきやすいように『船の渡し』を『橋』と言い換えて、話したのかもしれないね」と、おっしゃいました。

ハーンの時代、調布橋の近くにあった千ヶ瀬ちがせの渡しには、袂たもとに小屋があつたそうです。また、江戸時代には、青梅は、大雪が降る豪雪地帯であつたことも記録されています。

ハーンの「雪女」は、地元のいくつかの雪女伝説と比べて、描写も細かく、ドラマの展開も違います。ハーンが最初英文で書いた「調布の百姓」はハーンの使用人だということ



ですが、いったい誰なのか。雪女伝説は、全国各地にあります。使用人の故郷はどこなのか。青梅なのか、それとも別のところで、そこに伝わる話だったのか。また、この使用人は、実はハーンの妻セツのことであると聞いたことがあります。だとすると、セツの生まれ故郷松江の雪女伝説が語られたのか…

でも、いずれにしても、雪女の伝説が語られていたことで、それがハーンの心に受けとめられたのです。その想いととも、ハーンの手によって、伝説が伝説のままではなく、日本の代表的な名作文学「雪女」が仕上げられ、誕生し、こうも多くの人々に愛されているのです。

そう思うと、語るって、とても素敵なことだと思いませんか？

現在の青梅市調布橋のたもとに、「雪ゆきおんな縁ゆかりの地ち」という碑があります。ハーンの英文「雪女」にこの地が登場するゆかりで、平成十四年に建てられました。

商店街の方々は、地元の伝説を知る人も知らない人も、雪女を大変身近に感じているように思えました。青梅の人々の心に雪女は生き続けています。

ところで、ハーンの描いた雪女は子だくさんで、子どもを大事にする女性でしたね。

せっかくですから、青梅で、昔からよく食べられていたものや、昔の青梅の子どもたちが食べていたお菓子について、お話ししましょう。

地元の皆さんに聞いたのですが、昔は、お米が十分に取れなかったので、ご飯の代わりに、大麦を練ったものを切ったうどんのようなもの、「麦きり」を食べていたそうです。今のように蕎麦そばもあまりなかったのです。麦きりを食べた食感は、そばとうどんの間のような感じだということです。そして、おやつに「麦こがし」というものがあって、子どもはそれをよく食べていたそうです。

「麦こがし」のことは地元の多くの方が覚えていらっしゃいます。

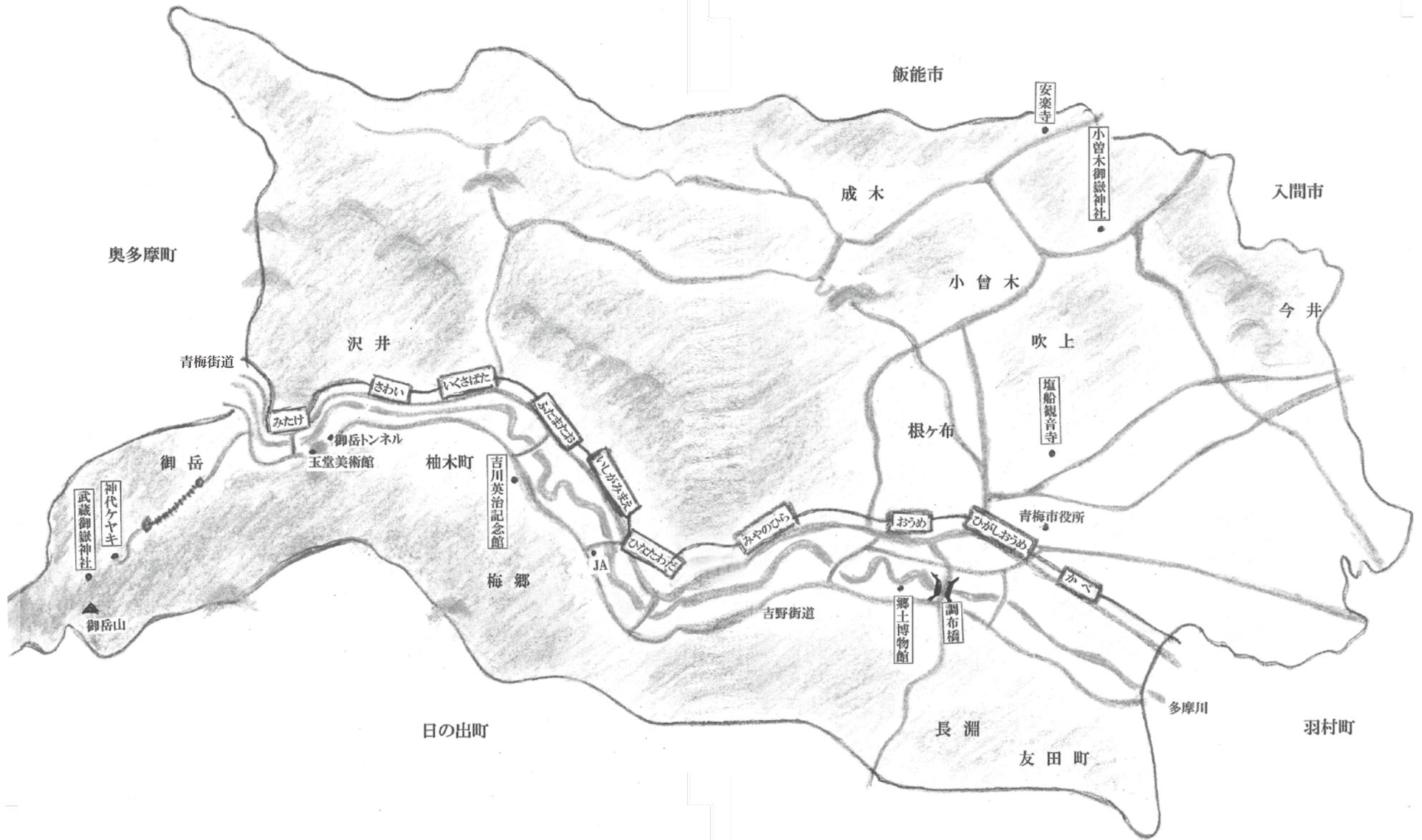
「麦こがし」というのは、大麦を焦げるまで炒いって、臼ですり、その粉に熱湯をかけてかき混ぜると、まるで蕎麦そばがきみたいに弾力が出ます。それを食べるのですが、家によっては、塩や砂糖を混ぜる場合もあります。でも、子どもは、実は、粉のままのほうが、香ばしいので、粉を口に入れて、屋外の広場で、ぱふぱふ粉を吹き出しながら食べる姿がよくみられた、ということなのです。

青梅の人々が心を寄せる「雪女」のお話を、こうした暮らしの変遷へんせん、青梅の文化と一緒に語り継いでいきたい： 青梅の地を歩いてみて、心からそういう気持ちになりました。

最後に、この物語作りの取材にご協力くださった青梅市民会館元館長石川裕之さん、同館教育部文化課主任小林恵子さん、昭和レトロ商品博物館顧問恩田敏造さん、青梅赤塚不二夫会館主任飯田規子のりこさん、青梅弁雪女語り部小川秋子さん、地元商店の多くの皆様、ありがとうございました。

(平野)

# 青梅市の地図



## あきる野五日市、今、昔

都心を離れて一時間余り、いつしか車窓の眺めは、自然いつぱいの景色に変わっていました。私達が心はずませながら降り立ったのは、あきる野市武蔵五日市駅でした。

そこは、まさに「東京の奥座敷」と呼ばれるにふさわしい、豊かな自然に囲まれた風光明媚な町でした。今、若者でにぎわう東京渋谷区が村だったころ、この五日市は、すでに町だったんですよ。そして、ずっと栄えていたんです。

九十を越えた郷土史研究家の、石井道郎先生が訥訥と、語ってくださいました。そもそも、五日市と言う名前の由来は、五と十のつく日に市を立てたからです。炭やまきを売る店が多く、また織物も売り買いされました。黒八丈と言う泥染めの絹

織物で別名「五日市」と呼ばれ、帯や着物の袖口、半てんの襟などに愛用され、武士や女の人達が欲しがると高価な物でした。

炭間屋が三十六軒、軒を連れ、養沢や檜原で切り出した木は、丸太のまま川に流します。途中、何ヶ所かある土場と言うところで皮をむき、角材にして、ふじづるで筏に組むものや、また、足場丸太と言う細長い丸太の筏にするものもあります。こうした筏が、秋川を下ります。筏は、水量豊かな多摩川に入り、四日程で現在の大田区六郷に着いたようです。馬の背で運ぶと、炭俵四俵だけでしたが、江戸の後期頃から、筏に乗せると約トラック一台分の炭俵を運ぶことができました。炭は、江戸前期は上流階級のものでしたが、江戸の後期になりますとまた、庶民の日常用品として使われるようになりました。筏に使われた角材は、深川の木場に入りました。「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるように、数々



の火事が発生した時、復興用資材として沢山の材木が切り出され多摩川を下ったようです。帰りは二日かけて歩いてもどりましたが、大金がふところに入ったので、途中、かけごとや花街で遊び、すっからかんになった人もいたようです。

筏乗りは、五日市の男衆のかっこよくて花形の仕事だったのです。

そして、このようなお話も残されております。

一八三三年（天保四年）ごろのことです。

天保の飢饉ききんの時に、天候不順が続き、畑の作物が取れないので食べ物が無く、餓死する人が多かった。この辺では、野生のところいもが取れました。拜島や熊川からも、大勢の人達が、ところいもを掘りに来ました。人々は生きていくために必死だったのです。それを見て、地元の人達は、「よそもんにはとらせるな」と、よその村から取りに来ることを許そうとしませんでした。しかし、その様子を見た名主なぬしは、みんなが取れるように、

「さて、さて。自然は誰のものでもない」

「皆、ひもじさと戦っている」

「みんな平等に、掘らせてあげようではないか」

血気にはやる村人をおさえて、さとしたのは名主、萩原はぎはら恵亮けいすけでした。この、ところいもの話を、当時の光厳寺こうごんじの住職 柏岩はくがんは、境内の石碑に残し今に伝えております。

ところいもを、御存じの方、いらっしゃいますか。ヤマイモ科の多年生つる草に属し、葉は、山芋よりも少し幅が広く、根は食用になるのですが、ひげだらけで大変苦味が強く、決しておいしい食べ物ではなかったでしょう。味付けはどうしたのでしょうか。戦後の食べ物が多かった時、さつまいものつるやかぼちゃのつるも食べ…かぼちゃのつるは、本当にまずかったそうです。

先人たちの教え、それは助けあうと云う優しい心、現代



を生きる私達にとって一番大切なことではないでしょうか。

尚、このお話は、平成二十三年三月、市制十五周年を記念して、あきる野市が発行した五日市物語「ふるさとのあれこれ」などから、一部参考資料として引用させていただきます。

秋の一日、私達があきる野市の歴史を訪ねている途中、五日市街道沿いに創業明治四十一年の老舗醸造元がありました。そこでは、独特のkokと豊かな香りを持つ無添加の「丸大豆醤油」を製造販売しております。こちらのお醤油は、贈答用品としても広く使われているそうです。

御覧下さい。光厳寺の山桜でございます。この山桜は東京都天然記念物に指定され「多摩川夢の桜街道の七十六番札所」にも数えられて居りますが、平成二十三年三月十一日、東日本大震災の折り、根元の斜面が一部くずれ、弱り



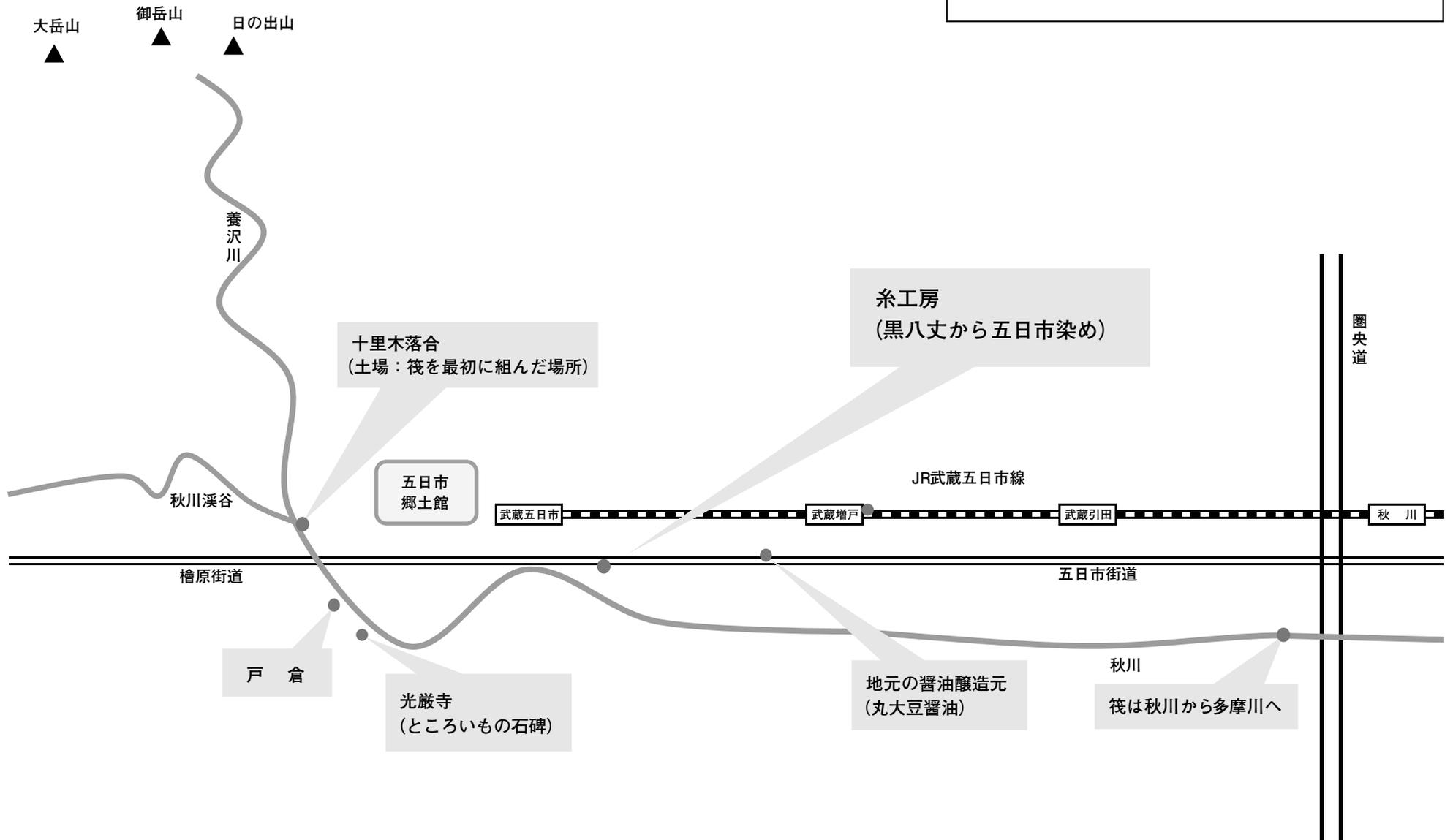
が見えました。けれども、見事立ち直り翌年四月には、およそ四百年の樹齢を誇るこの桜が、いつものように花を咲かせ人々の目を楽しませてくれました。でも、木の側には近づけなかつた様です。最近、それも解除になり、まずは、ひと安心と言うところですね。

悠久の、時の流れに培われた歴史と文化の町、あきる野市五日市、そこは又、都会の喧騒をしばし忘れ、憩いのひとときを過ごす事の出来る町でもあります。皆さま、一度訪ねて見ては如何でしょうか。

昔から多くの人々に親しまれている光厳寺の桜、これからもかわらぬ美しさを見ることができるよう願うばかりです。

この度の取材に快く応じて下さった方々、また親身になって資料を下さったり、お世話を下さった方々、誠にありがとうございました。衷心より御礼申し上げます。

# あきる野五日市、今、昔、周辺マップ



## 奥多摩むかし道

みなさんは「奥多摩むかし道」をご存知ですか？

JR奥多摩駅から小河内までの旧青梅街道を整備した約十キロ、時間にしておよそ三時間余りの遊歩道です。

鳩ノ巣村、小河内村、氷川町が合併し奥多摩町が誕生（昭和三十年）してから四十年を経て平成七年に完成した、まだまだ新しい道です。

ちなみに、現在の青梅街道（ルート411）は、それとは別に、小河内ダム建設の為に作られたダム専用道路が開放（昭和二十年）されたものです。

この「むかし道」は、江戸時代、石灰石を運ぶ道として大変栄えたそうです。

昔は道が狭く、行き交うのにも大変な難所だったのでしょう。物資を運ぶために



使われていた多くの馬、牛が、谷底に落ちて死んでしまいました。其の供養のため「馬頭さま」又、牛の頭と書いた「牛頭観音様」が祀られています。

今も歩いていると、いたるところに当時から語り継がれた場所があります。

たとえば、「馬の水飲み場」

ここで疲れた馬を休ませ、馬方衆も、たてばと呼ばれる茶店で一服したそうです。

「むし歯地藏尊」

歯が痛くなると、炒った大豆をお供えしてお祈りしました。すると、痛みが治まったと言われています。

「縁結びの地藏尊」

二体の、小さいお地藏さまが寄り添っています。人に知られずこっそり二股の大根を供えて祈れば、結縁成就です。

里近くなるにつれ、道沿いに柚子の木が多く植えられていました。その昔、沢井の柚子とともに、この甲州裏街道



をとおり神田須田町に運ばれたとか： 沢井の柚子は村内に沢が多く、豊かな水に恵まれ、傾斜の強い肥えた土地を利用して、香りの高い柚子になったそうです。いわゆる適地適作ですね。

多摩川支流の日原川、川乗谷の聖滝ひじりたきには、若い少年が「岩魚を大切にしないとたたりがある」と大人をいさめた「岩魚の精」と言う話も語り伝えられています。

今では、奥多摩魚センター（旧・都水産試験場）で岩魚、山女魚、鱒が養殖され、通年安定して供給できるようになりました。なかでも「奥多摩ヤマメ」は三年で二キロ以上にも成長して刺身、ムニエルと多くのレシピで食されています。

私たちが、鳩ノ巣駅近くの釜めし屋さんで奥多摩ヤマメを頂きましたが、大変美味しくお値段もリーズナブルで私たちには嬉しいものでした。

このように奥多摩には、「語り継がれた不思議な話」、「地元にまつわる美味しい食材」、「自然にふれ合う喜び」と私たちを満足させるものが揃っています。

季節を変えて是非お楽しみ下さい。

今日は、「盗まれた馬頭さま」、「熊をくすぐる」をお話しいたします。

「盗まれた馬頭さま」

惣岳河原に臨んだ崖っぷちの道脇に、江戸の昔から、わしらの祖先が愛馬の供養のためにと祀まつった馬頭さまがおられた。

だが、いつ、誰が、馬頭さまを持ち去ったものか、台座だけが残されている。これについては、心配な事があるんだよ。何故かと言うと、こんな話があったそうだ。

むかしある山里の小高い峰に、小さな地蔵さまが百年もの昔から、にこやかに里の村人を見守っていました。

ある時、旅の男がそのお地蔵さまの気高い、かわいらしさに、つい持ち去ってしまいました。

都に帰った男は、庭に地蔵さまを祀り、毎日、眺めては楽しんでいました。

しかし、その頃から、病人が出たり、事故があったり、家運もみるみる傾いて、やがて、男も重い病いにかかり、医者から見放されてしまいました。

その時になって男は、地藏さまの事が妙に気にかかって、気にかかって仕方ありませんでした。

親類の者にわけを話し、「地藏さまをあ山里に戻し、村の人々にわしが詫びていると伝えてくれ」と直ぐに旅立たせました。

山里に戻った地藏さまのお顔は、晴れ晴れと見え、久しぶりのお参りに、峰へ登る村人の列も、長く長く連なるほどだったという事です。

この話を聞いて、わしらの村の者は、この馬頭さまを持ち去った者に、おさわりでもあって、今頃、どんなにか難儀をしている事かと、案じているのだ。だから、馬頭さまのお戻りになる日を、一日千秋の思いで待っているのだよ。

「熊をくすぐる」

むかし、むかし、このあたりには変わった猟があったそうさ。

「熊穴の猟」と呼ばれ「熊は冬至の頃、たらふく食いためると、春まで冬眠に入り、その間、自分の棲み穴へ入って来たものには危害を加えない」というので、村の衆にとっては正月前の何よりの稼ぎ場だった。

ある日、熊の猟師が二人連れだつて、栃寄りの山へ登った。

「棒でつついてみんべえ、それとも燻してみんべえか」

「あにい、めんっどつくせえ、おらがへつてみんべえよ」

伍作さんは仲間を穴の外に待たせ、「熊公が留守だったらおらが出てくるけれど、間違っても撃つんじゃねえ」と、よおく念押し、おっかなびっくり熊の穴へもぐりこんでいった。

真っ暗な中で、熊の匂いと気配に、伍作さんは「いたあ、いたあ…」と、心

の中で声を上げ、手探りで、熊がよおく眠っているのを確かめると、熊の後に回りこみ、奥の壁に手をかけ「よっころしよ」と、熊の体をおっぺしてみたが、何しろでっけえずうていなので動かない。そこでもう一度、力いっぱいいくすぐるように撫でまわした。

「うへっ、うっへい、やめてくんろ」と、言ったかどうか……くすぐったくなつた熊は、モソモソと穴の外へと出て行った。

そこを「よし！」と、仲間の猟師が、「ズドーン」と見事に撃ちとめた。

今ではさすがに伍作さんの様な命知らずはいなくなったなあ……

ところで、みなさんは熊に出会った事がありますか？

奥多摩でも「クマ出没注意」の看板をよく見かけますが、実際に出会う事はそんなにありませんよね。

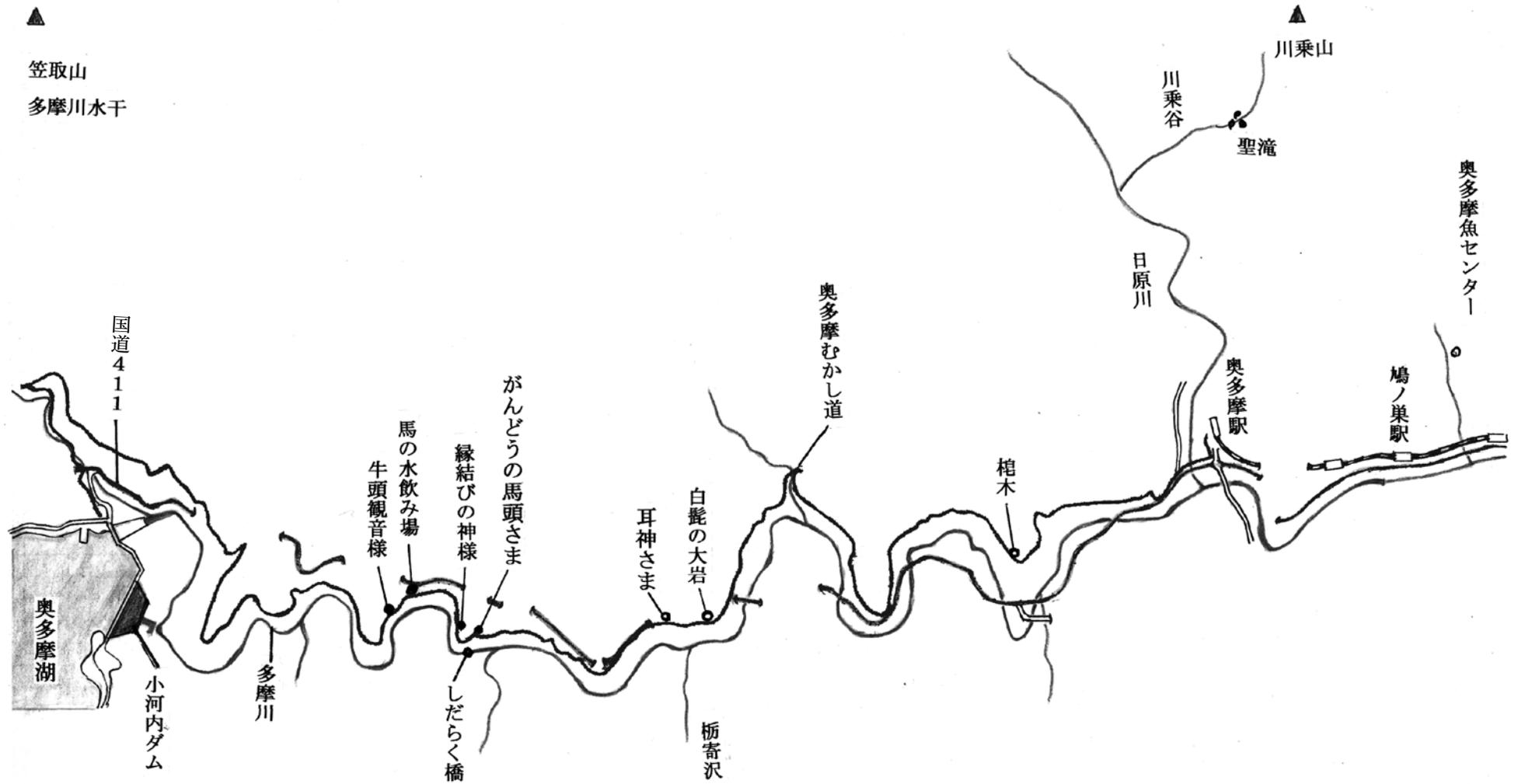
ところが、なんと私は七、八年前に、奥多摩湖の奥、一の瀬高原から入った笠取山の水干と言って、いわば、多摩川源流、多摩川の始まりのところで、熊に出くわしました。

前方から、走って来る黒い物体……その瞬間私は何を考えたか……犬にしては少し大きい、……首輪もしていない……次の瞬間、熊は立ちつくし、私は後ずさり……その間十メートル余り、時間にしてほんの三十秒足らず……私には凍りついたような時間ときでした。

その後、何事も無かったように、熊は静かに茂みの中へ姿を消しました。よく言われていますが、登山者もラジオ・鈴等を持ち、熊に「人間が近くにいますよ」と知らせるのも大切ですね。熊だって本当は、人間が怖いんだそうです。

「奥多摩むかし道」にまつわる民話については、奥多摩町の荒沢屋様、食については青梅市沢井の福島様にお世話になりました。お伺いしてお話しをお聞きし、ご著書なども参考にさせて頂きました。ありがとうございました。

# 奥多摩むかし道



文責 川井方子 木下由紀子 富田和美 富田元子 西尾弘 馬場エリカ

平野啓子 柳澤淳子 渡辺真記(あいうえお順)

協力 青梅市 奥多摩町 あきる野市 郷土史研究家  
民話伝承者 J A 西東京 青梅市役所 青梅市郷土博物館

青梅市民会館 昭和レトロ商品博物館 青梅赤塚不二夫会館 青梅駅前の商店街の皆様

N H K 文化センター八王子教室

N H K 文化センター八王子教室「平野啓子語りの世界」受講者全員

美しい多摩川フォーラム地元出身の会員、地元の皆様

一般社団法人松江観光協会 高橋一清観光文化プロデューサー

指導 平野啓子

企画・製作 美しい多摩川フォーラム

「食と文化の交流イベント」実行委員会

制作 美しい多摩川フォーラム

発行 美しい多摩川フォーラム

東京都青梅市勝沼三一六十五 青梅信用金庫内

電話(0428)2415632

発行日 平成二十六年三月十四日

この冊子に収録した物語は、農林水産省関東農政局の「食と地域の交流促進対策交付金」(平成二十三年度～二十四年度)を活用して掘り起し、平成二十五年一月二十九日立川グランドホテルにて開催した「食と文化の交流イベント」観光と連携した都市農産漁村の交流促進(クリーン・ツーリズム)に於いて、各物語の執筆者自身が「語り」で発表しているものである。なお、「青梅と雪女伝説」については「雪女」(ラフカディオ・ハーン作/池田雅之編訳)を引用するなど新たに作成しなおして収録した。

※無断転載禁止